常葉大学外国語学部紀要〈論文〉
第37号　　2021.3.　　67頁～　81頁

角田房子『アマゾンの歌』
－ブラジルで胡椒産業を興した日本人と移民家族のジェンダー－

江　口　佳　子

Fusako Tsunoda, *Amazon no Uta*
The Japanese who promoted the pepper production industry in Brazil and the gender of the immigrant family

EGUCHI Yoshiko

2020 年 11 月 4 日受理

抄　　録

本稿では、作家の角田房子が、1965 年 11 月から 1966 年 1 月にかけて、ブラジルのアマゾン地域やサンパウロでの現地取材を基に執筆した記録文学『アマゾンの歌―日本人の記録』(1966 年) を取りあげる。北部パラ州のアカラ植民地（現トメアスー）への日本からの移住は、1929 年の第 1 回農業移民に始まり、第二次世界大戦で日本とブラジルが国交を断絶する 1942 年まで 2 千人以上が入植している。本稿では、戦後、日本人移住者がアマゾンでの胡椒産業を成功に導いた過程と、移住生活を支えた女性像について考察する。角田は現地インタビューを介して、日系農家によりトメアスー植民地が維持されてきた要因を入植者の協働、自治意識、民主性と共に、家族制度内での女性の献身や、異文化における女性の適応力、ステップファミリー形成による家族の安定に見出し、小説に描いている。

キーワード：角田房子、アマゾン、日本人移民、胡椒産業、ジェンダー

1．はじめに

角田房子（1914 - 2010）はノンフィクション作家保阪正康との対談「帝国陸軍軍人の品格を問う」の中で、第二次世界大戦前にパリのソルボンヌ大学に留学していた時の出来事を述べている。留学中の 1939 年 9 月に夏休みを利用してエジプトに友人と旅行していたところ、ナチス・ドイツによるポーランド侵攻のニュースを知る。ヨーロッパにおける戦争の危険性を察知し、急いでパリに戻り、日本へ帰国することを決める。日本人の帰国のために用意された船に乗り、ニューヨークへ渡り、既知の米国人夫妻の家に一時滞在した後に、鉄道でアメリカ大陸を横断してサンフランシスコへ

行き、そこから、船で帰国したという体験をしている[1]。欧米に滞在した経験から、欧米と日本の国力の差を肌で感じ、日本の敗北を予期したこと、「あの昭和の戦争の全時代を生きてきた」と述べ、戦争を通した日本の近現代史を描いた、作家の姿勢がうかがえる。

戦争に関連する角田の作品は、昭和の軍人についての評伝の他に、第二次世界大戦を挟んで、〈外地〉に移住した日本人を題材としていることも特徴である。満州やブラジルに移住した日本人に関するものである。特に、1960 年代後半から 1970 年代後半にかけて、ブラジルへの移住者を題材とした『アマゾンの歌－日本人の記録』(1966)、『ブラジルの日系人－新天地に生きる血と汗の記録』(1967)、『約束の大地』(1977)、満州への移住者を題材とした『墓標なき八万の死者』(1967)、『雪椿の生涯―満州移民の妻』(1970) を発表している。これらの作品に共通するのは、20 世紀に日本が国策事業として送り出した移民の歴史である。『アマゾンの歌』は 1929 年～ 1965 年、『約束の大地』は 1932 年～ 1970 年、『雪椿の生涯』は 1933 年～ 1979 年と、それぞれの作品で、30 年から 50 年に亘る移住者の〈外地〉での半生を描いている。

日本文学において、南米移民を題材にした作品は多く、中でも、ブラジル移民についての作品が多い。第 1 回芥川賞を受賞した石川達三『蒼氓』(1935) を初めとして、上野英信『出ニッポン記』(1977)、北杜夫『輝ける碧き空の下で』(1988)、大城立裕『ノロエステ鉄道』(1989) 等、様々列挙することができる[2]。しかし、作品の多くが男性作家によって書かれており、角田は稀有な存在と言える。また、ブラジルへの戦前移民の多くがサンパウロ州のコーヒー農園での契約労働者として渡伯したため[3]、ブラジル移民をテーマとした作品の大半はサンパウロ州を中心としたブラジル南東部が舞台である。つまり、北部アマゾン地域に移住した日本人移民についての作品は少なく、この点においても、角田の作品は、貴重な作品であると思われる。『アマゾンの歌』と『約束の大地』は、それぞれ、胡椒栽培とジュート栽培に携わった日本人移民を題材としている。この二つの農作物は現在でもブラジルの農業産品であるが、日本人移住者が熱帯アマゾンの過酷な自然環境の中で、新しい産業として興した産業であり、ブラジルの農業経済に多大な貢献をした。しかし、この歴史的事実は、日本ではあまり知られていないのではないだろうか。

本稿では、『アマゾンの歌』を取りあげる。角田は 1965 年 11 月から 1966 年 1 月にアマゾンやサンパウロで現地取材を行っており、本作品は、その取材に基づいて執筆された記録文学である。北部パラ州のトメアスーに農業移住をして、胡椒産業を成功に導いた日本人移民が描かれている。角田は「あとがき」で、「日本にはかれらの記録といえるものがない。統計などの資料はあるが、それは血の通った人間の記録とはいえない」と述べ、アマゾンに戦前に移住した日本人移住者が、〈外地〉で何を考え

---

[1] 保阪 (2007)『昭和の戦争』、69 ～ 71 頁

[2] ブラジル移民を題材とした小説家として、西 (2018 年) 276 頁、川村 (2019 年) 10 頁が角田房子の名を挙げている。

[3] 丸山 (2010) 1940 年のブラジルにおける州別日本人移民 205,850 人のうち、93.9%がサンパウロ州に在留 (106 頁)。1958 年の 325,520 人の日系人口のうち、75.7%がサンパウロ州に居住 (173 頁)。

たのか、どのように暮らしていたか、登場人物の集合的構成によって、移民像を浮かび上がらせている。また、移住というと男性による開拓に比重が置かれるが、女性の働きについて注目している。

> 私はかねがね移住者の女性に、強い関心を抱いていた。それまでサンパウロを中心とした南伯の取材でも、開拓者として立派に生きぬいた男たちの蔭には、必ず妻の献身があった。彼女たちは表面に立つことがなく、全く目立たないが、しかし、彼女たちなしには移住者の成功もなかった―とさえ思われる実例をいくつか見てきた。（角田（1976）、227‐228 頁）[4]

角田がトメアスー移住地を訪れたのは 1965 年であるが、現在なお、日系農家が農業を営み、農業生産と環境保全を両立させる農業経営アグロフォレストリーで、トメアスーはブラジル内外で知られている[5]。当地では、戦前の日本人移住者がブラジルで興した胡椒栽培が続けられている。本稿は、胡椒産業を興すに至ったトメアスー移住地の日本人移住者とその生活を支えた女性像を、『アマゾンの歌』から考察するものである。

2．アマゾン地域への日本人移住

最初に、物語の舞台となるアカラ植民地（のちにトメアスー植民地に改名）への日本人入植の経緯について整理しておきたい。

2.1　ブラジル移民[6]

近代日本の海外移民政策は明治時代が始まってすぐの 1868 年（明治 2 年）、ハワイへの出稼ぎ移民により始まった。ハワイは砂糖プランテーションの労働不足が深刻であったため、ハワイ政府から明治政府に農場労働者送り出しの要請があった。この時期、日本では人口増加、農村部での余剰労働力の活用の場が模索されていた。このため、明治政府は海外移民政策を積極的に行い、ハワイに引き続き、米国本土やカナダへも農業移民を送り出した。ラテンアメリカへは 1899 年（明治 32 年）のペルー移民が最初であり、渡秘して砂糖プランテーションや製糖工場で働いた。

1900 年頃から、米国本土において排日運動が激化したため、移民の主要な送り出し先はラテンアメリカ諸国となる。1899 年から 1969 年まで、日本がラテンアメリカの国々と二国間移住協定に基づいて送った移民の総数は約 31 万人であり、1 位ブラジル（約 24 万人、78%）、2 位ペルー（3 万人）、3 位メキシコ（1 万 5 千人）、4 位パラグアイ（8 千人）、5 位　アルゼンチン（7 千人）である。

---

[4] 本文中の頁については、以下同様、角田房子『アマゾンの歌』（1976 年）より。
[5] アグロフォレストリー：収穫や生育期間の異なる他の農作物を同じ農地に植えて、作物被害、価格変動を回避し、環境に配慮しながら、持続的に土地を利用する農業方法。
[6] 三田（2018）、118 ～ 125 頁

ブラジルは1850年頃よりコーヒー産業が盛んとなり、共和政が成立した1889年にはコーヒーが輸出総額の67%を占めるようになるが、1888年に奴隷制度が廃止していたため、労働力不足が深刻となり、ヨーロッパ出身者を中心に、世界中から移民が流入する。日本政府は、1895年にブラジルと日伯修好通商航海条約を締結しており、1908年に第1回ブラジル移民が笠戸丸に乗船し、サンパウロ州サントス港へ入港する。移民たちは、雇用主の下で3年から4年の一定期間をコーヒー農園で賃金労働に従事する契約労働移民（コロノ）として渡伯した。ブラジルのコーヒー産業は主に南東部において発展した。南東部でも、リオデジャネイロ州やミナスジェライス州には奴隷人口が多かったため、解放奴隷をそのまま雇うことが多く、労働力はそれほど不足していなかった[7]。それゆえ、日本人移民の多くは、サンパウロ州内陸部にあるコーヒー農園で働いた。

2.2　アカラ植民地への入植[8]

1908年の第1回移民からの20年間、ほぼ毎年、日本はブラジルへ移民を送った。1928年までに約34,000人がサンパウロ州に移民として渡っている[9]。この間、ヨーロッパで第一次世界大戦が起こったこともあり、ヨーロッパからの移民が激減し、それを補うために日本人移民が多く受け入れられた。1918年のブラジルの外国移民うちの約4割を日本人移民が占めている[10]。しかしながら、当時のブラジルでは、優生学思想の影響で、国民の「白人化」を標榜しており、アジア人流入に対する反対運動が起きていた。1923年にブラジルの下院で日本移民制限法案（第291号）が提出され、日本人移民は制限されることとなった。こうした状況の中、政府の財務委員会が1924年にサンパウロ州の日本人移民の実態調査を下院議員のオリヴェイラウ・ボテーリョに依頼した。翌年、ボテーリョは日本人移民のコーヒー労働者としての資質の高さを報告した。

南東部への移民が困難になる中、日本政府はそれ以外の地域への農業移住地の候補を探した。1916年に第一回政府ミッションをアマゾン地域に派遣する。1924年、パラ州政府は、サンパウロ州における日本人移民の高い評判から、アマゾン流域での農業開発のため、日本人移民誘致を要請する書簡を在伯日本大使館に送る。当時の田付七太日本大使は幣原喜重郎外相にパラ州知事からの書簡を連絡し、日本政府は鐘淵紡績株式会社に諮った。1925年、鐘紡の取締役福原八郎を団長とする第1回調査団が現地へ入り、入植地としてパラ州の州都ベレンからアマゾン川の支流アカラ川流域を選定した。パラ州政府はアカラ郡の広大な土地（50万町歩）を日本に無償提供することを約束する。1928年にパラ州の入植を統括するために、鐘紡が主たる出資者となり、南米拓殖株式会社が設立された。1929年にパラ州の州都ベレンに、現地法人

---

[7] 南東部はサンパウロ州、リオデジャネイロ州、ミナスジェライス州、エスピリトサント州の4州で構成される。
[8] アカラ植民地への入植の経緯については角田（1976）19～26頁、丸山（2014）を参照。
[9] 三田（2018）126～127頁
[10] 三田（2018）119～120頁

コンパニア・ニッポニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジルを設立する。同年、第1回の日本移民（43家族、189名）がアカラ郡内のトメアスーに入植した。

3．移民家族のジェンダー

『アマゾンの歌』の主人公は広島県出身の移民1世山田義一氏であり、その家族を中心に、日本人移民をめぐる出来事が展開する。語り手の視点は、主として山田義一の視点と重なるが、山田氏の家族や植民地の他の移住者にも重なる多元的視点による叙述である。物語の舞台は、都市部から離れたアマゾン流域のアカラ植民地と州都ベレンの2ヶ所に限られる。しかし、入植者、拓殖会社関係者（会社幹部、現地幹部や社員、農業指導員）、日本政府関係者（大使、大使館員、政治家）等、多様な人々が登場する。角田房子は本作品の登場人物はすべて実在し、実名であると「あとがき」に書いている。ここでは、アカラ植民地の開拓と移住地で女性が果たした役割を見ていくことにする。

3.1　入植生活の始まり

山田義一は1929年のアマゾン開拓第1回移民の一人であり、妊娠中の妻スエノ、次女三江（七歳）、長男元（二歳）を帯同した。長女と三女は実家の兄弟に残し、家族離散での渡伯である。日本政府は南米への農業移民は二人以上の家族で渡航することを義務づけていた。冒頭は、ブラジルでの最初の寄港地リオデジャネイロからパラ州の州都ベレンへ到着し、ベレンから最終目的地のアカラ植民地へ向かう船上である。ベレンから船でさらに10時間かかる行程であった。山田が甲板から目にするのは、小舟を陸に寄せてバナナを荷下ろしするブラジル人労働者の姿である。裸体の彼らの肌色は茶褐色で、厚い唇が目立っている。山田は、日本のホタルの3倍以上の大きさで頭が光るホタル、生き物の死骸を啄んで忌み嫌われるウルブー（urubu、クロハゲタカ）、茶色く濁った泥水の大河アマゾンを目にして、日本とはまったく異なる風景に不安を抱く。しかし、妻スエノは「アマゾンまで来たんじゃけんのォ、ぜんぶ日本とは違うじゃろう」(9頁)と日本との違いは覚悟済みであるかのように、平然と受け止める。スエノは口数が少なく、物語中、彼女が発する言葉は少ないが、気丈な人物として描かれる。もちろん、スエノのような女性ばかりではない。ある女性はアマゾン川を照らす月光の中で黒々とした密林に入って行く不安感を「どこへ行くんかなァ……大きな森に船がのめりこむような……」（14頁）と声を発している。

船上生活最後の晩、移民たちは甲板に集い、男たちは酒を酌み交わし大声で話し、女たちは後ろで固まって番茶を飲みながらひそひそ声で話している。原生林に切り拓くことになる男性と、夫の付属的存在である女性では、それぞれ別の世界を作っている。山田夫妻は下船寸前まで、夫婦での会話をしない。山田は次のように思考する。

夫に従うのが妻のつとめだと教えられて育った彼女は、その通りに生きてきた。だがそれは、スエノに何の意志もない、ということではない。山田は折にふれて、

妻の心に手ごたえを感じた。スエノは自分の意志を、はっきり掴んでいるらしかった。しかし山田はそれを引き出そうとしたこともなく、妻もまた示そうとしない。(17頁)

山田は妻の自我を軽視しているわけではないが、ブラジル移住を妻に相談せずに決めている。日本で兵役を務めており、農業の経験もあることから、体力と技術の面での自信はあった。広島の山田の家は中農であり、兄に子供がなかったため、家を出る必然性はなかったが、出稼ぎを十年間と定めて、ブラジルで成功して帰国することを決意する。

山田一家を含む入植者はアカラ植民地へ到着する。既に、南米拓殖株式会社（以下、南拓）によって、現地法人、病院、入植者のための食料品や雑貨を扱う販売所が建てられ、受け入れ体制が整えられていた。しかし、各入植者に分け与えられた土地は原生林が生い茂るばかりで、住居も何も用意されていなかった。入植者たちは一時的に南拓の宿舎に滞在し、住居となる掘立小屋を建てる。そして、移住生活を軌道に乗せるために、割り当てられた耕地を斧や鎌で精力的に整地する。

原生林の伐採は重労働であり、耕地にするには日数を要した。気持ちばかり急く山田に、妻が日本からの荷物の中に野菜の種子を一杯持ってきたと言う。そのようなことを考えつきもしなかった夫を驚かせる。そして、山田が耕地にする一方で、スエノは身重の体で畑仕事をする。入植してから約半年後、スエノは女児を出産する。彼女は産後もすぐに畑に出る。夜明けには朝食の支度をすませ、日中は畑に出て、途中、子供たちの昼食や授乳のために家に戻り、夕方には洗濯して夕飯を作った。夜は夫が子供たちに日本語を教える傍ら、妻は縫物をするという日常であった。

移住者たちは、密林の生物に格闘しながら日々を送る。そのイニシエーションとして、サウーバ蟻による襲撃を受ける[11]。山田はこのサウーバ蟻に体中を噛まれる。この時、スエノが日本から持ってきた毒虫用の塗薬が役立つ。山田はスエノが毒虫の薬を用意していたことも知らされておらず、渡航する前に、妻がアマゾンでの生活を彼女なりに考えていた、その用意周到さに驚く。

移住者たちは、アマゾンには積極的に人間を襲う獰猛な動物は生息しないと南拓関係者から言われているが、オンサ（onça、豹）から顔を引き裂かれたカボクロ（現地の農場労働者）の存在や夜間に周囲をうろつく獣の足音等、恐怖と闘いながら、肉体的にも精神的にも慣れようと努める。

移住者の生活を恒常的に困難にしたのは熱帯病のマラリヤであった。アマゾン流域に生息する蚊を媒介して生じる原虫感染症であり、発症すると嘔吐や40度近くの高熱が数日間続き、重症化すると死に至る。アカラ植民地では、入植者とその家族が次々に亡くなった。山田家でも、家族のほとんどがマラリヤを患い、スエノが井戸から水を汲んで、高熱を冷まそうと、寝ずの看病をした。南拓は入植者に特効薬のキニーネ

[11] サウーバ蟻：南米の熱帯地域に生息し、食料となる菌を作るために体の何十倍もの大きさの葉を背負って運ぶ習性がある。集団性があり、農作物に被害を与える。

を予防薬として配布する。

さらに、マラリヤからの合併症から生じる伝染病の黒水熱が移民の生命を脅かす。この病気は過度のキニーネの服用により発症した。マラリヤ同様に嘔吐や高熱を出すのであるが、初めは血のような赤い尿を出し、黒褐色に変色すると助かることはできなかった。死亡率は80%で、1935年～1936年にアカラ植民地から、大勢の黒水熱による犠牲者が出たため、サンパウロ州等の南東部の日本人移民から、アカラ植民地は“生き地獄植民地”、“マラリヤ植民地”と呼ばれて恐れられた[12]。黒水熱で死亡すると移民政策に水を差し、また移民の間で不安を助長するため、他の病気や事故死として処理される場合が多かった。ここで、角田は移民の惨状だけでなく、南拓が運営した中央病院の医師や看護婦の移住地における貢献を記している。看護婦たちはアカラ移住地開始の翌年に、アマゾン奥地に赴任したのだった。

みなが感謝しながらも、看護婦たちの生活に目を向ける余裕はなかったのであろう。筆者が人々の記憶からひき出すことのできた名前をあげておく。初代看護婦長・高橋春、二代婦長。上村美津江、三代婦長・吉村ヨシ子、そのほか西尾花子、茂泉政代、篠田冬子。(91頁)

角田は断片的な情報しか得られなかったとしつつも、現地取材をした折に、当時を知る移住者たちから、看護婦に対する感謝の言葉を聞き取っている。

3.2　野菜組合の結成

南拓はカカオには世界的な販路があるという理由で、アカラ植民地の主要作物として選定していた。しかし、カカオは実をつけるまでに4年はかかる作物であり、さらに、アマゾンの土壌ではなかなか良い苗が育たず主作として成り立たなかった。入植者たちは、適正作物が選定されるまでの代替作物として陸稲で米を栽培した。しかし、ブラジル人が米を主食としないため、市場価値が低かった。山田家でも、カカオのための十分な耕地が開けなかったため、米を栽培して売ろうとしたが、安値で買い叩かれた。スエノが家事の傍ら、自給自足のために従事していた野菜畑からの収穫が、山田家の家計を助けることになる。スエノはいろいろな野菜を作って、味噌と醤油も作って売ることを考えていると夫に伝える。

南拓は、移住者たちの自主的な発意を受け、植民地から州都ベレンまでの輸送費を負担することで、「アカラ野菜組合」が設立する。そして、南拓社員がベレンで行商した。ブラジル北部の人々は多様な野菜を食べるという習慣が無かったが、アカラ植民地の野菜を使った料理をブラジル人にふるまうなどの工夫をして、ブラジル人に野菜の味を覚えさせた。そうして、アカラ植民地の野菜の売り上げが増加する。組合は、野菜の売り上げの高い移民の家族に奨励金を出した。山田家も奨励金を得ることがで

[12] 角田（1976)、80～81頁

きたが、「スエノは野菜作りに独特のカンを働かせ、アマゾンの気候風土に適した栽培方法をみつけていった」（62 頁）とあり、一重に彼女の野菜づくりの成果であった。

ベレン市はブラジル北部のなかでも抜きん出て野菜の消費量が多くなり、野菜組合の経営は軌道にのる。しかし、植民地での主要作物が未だ決まらず、経営難に陥っていた南拓が「作物の三割を会社に納入すること」という条項を提示してきたため、苦しい生活を強いられていた移住者たちは、条項の撤回を求め、“三割争議”と呼ばれた反対運動を起こす。1931 年のことであり、入植 2 年目であった。反対運動をする人の中には、困窮する生活で鬱積した感情を露わにして、騒動を大きくしようとする者たちもいた。

その後もアカラ植民地では経営不振が続き、主たる出資者である鐘紡本社が、南拓とアカラ植民地の経営内容の見直しを 1935 年に断行する。対策のうち、アカラ植民地の適正作物を実験するためのアサイザール農事試験場の閉鎖とコロノ制度の解消は、入植者の生活基盤を揺るがした。南拓による経営の見直しという、移民の生活を揺るがす事態が生じたが、「野菜組合」設立や争議の交渉を通して、入植者同士が結束する。

3.3　家父長制度の中の女性

山田は、家長というものは家庭において、ある程度の圧迫を感じさせるほうが良いと考えていた。スエノは控え目であったが、山田は妻を「いつも本能的な知恵で、家族に尽くす方法を見つけ出し、努力を傾ける」と評している。移住地には、戦前の日本の家族制度がそのまま持ち込まれたため、女性は〈妻〉という役割に封じ込められていた。このため、スエノが自我意識と葛藤する様子は特段描かれない。スエノの自我は、山田の自己実現の延長として認識されていた[13]。

しかし、ある夜更けに、現地労働者のカボクロが急用だと来訪した時、山田はポルトガル語を解すことができない。スエノが片言のポルトガル語で身振り手振りをつけながら、カボクロの用件を理解する。その様子に、山田は驚き不意をつかれたと感じる。強い家父長制度の中で〈夫〉と〈妻〉はジェンダーの役割に基づいてはいたが、日本男性移民もブラジルでは、社会的弱者であった。おそらく、山田には、妻スエノが自我を、家庭を超えたブラジル社会という「広い社会」[14]に直接発展させてしまうように見えたのであろう。のちに、スエノは娘に手伝わせながら、食料や雑貨を売る小さな店も経営し、ブラジル人の客との応対も十分にこなしていく。スエノは、〈外地〉という限られた環境の中で、生きる術を見出そうとする女性として描かれている。

物語では、移住者の家族や女性同士が日常的に交流する描写はほとんどない。互いの家が数百メートル離れているために、物理的に困難であったことが理解されるが、数カ所女性だけの場面がある。スエノが退耕する家族を見送る場面である。主作物を

[13] 水田（1982）、26 頁
[14] 〃　　、27 頁

選定できないアカラ植民地では、米が一番の生産物であったが、米の収穫期が終わると、“退耕シーズン”と呼ばれるほど退耕者が続出した。アカラ植民地には、1929年から国交が断絶する1942年まで352家族2,104名が入植したが、状況が改善する見込みがつかず、退耕者が後を絶たなかった。最も退耕者が多かったのが、1935年〜1936年にかけてであり、1942年には、戦前入植者のうち約77%（1621人）が退耕してアカラ植民地を去り、96家族483名しか残らなかった。退耕者がまず目指すのは、ブラジル南東部の大都市サンパウロであった。しかし、多くの場合、先の見通しをつけずに船に乗った。見送りに行った知人から、落ち着いたら手紙を出すと言われて、スエノは「今の苦労を笑い話にする日があるんじゃろうねぇ」（82頁）と言うが、女性二人は、そのような日が来るとは決して考えておらず、「畑仕事の荒れた手を取り合い、くり返し別れのことばを述べて、涙を流した」と描かれる。

その他、日々の苦しい暮らしの中にも、女性同士の交流がわずかにあり、農業指導者の平賀練吉の妻と入植者の女性の集まりであった。平賀練吉の父親は鐘紡の重役を務め、南米拓殖会社設立の発起人の一人であった。練吉は東京帝国大学農学部林学科を卒業し、アマゾン開発青年団副団長として渡伯し、青年団の解散後、請われてアカラ植民地の責任者として赴く。平賀の妻清子は軍人家族の出で上流階級に属していた。清子はアカラ植民地の入植者家族の凄まじい窮乏や、女性たちが生活や病に追われ、疲労する姿に心を痛めた。病人を見舞ったり、女性たちに料理や裁縫を教えたりして、話し相手になった。女性達は清子との交流を楽しみの温かな心に慰められたという。スエノも安らぎを求め、平賀家に新鮮な野菜を届けるために、頻繁に訪れている。女性移住者たちの移民生活を支えた一面であった。

4．アマゾン定住化と胡椒産業

アカラ植民地は「アマゾン地域に日本人発展の道を開こう」（98頁）という理念のもとに実施された。入植後10年以上経ても適正作物が決まらず困難な生活を続けていた入植者たちは、植民地と日本はつながっていると信じて、その試練に耐えていた。こうした状況の中で、第二次世界大戦を〈外地〉で生き、胡椒産業を興すに至っている。

4.1　戦争と愛国心

山田は昼間の労働がどんなに疲労していても、子供たちに日本語を日々教えることを欠かさなかった。元教員の入植者の家にも子供たちを通わせ、子供たちへの教育を重視していた。長男の元はブラジルの小学校を卒業したが、貧困生活から、ベレンにある中学校に行くことはできなかった。山田は元に自ら日本語を教え、日本の歴史の本を一緒に読む。「日本語をよく理解することによって、元は日本人の精神を持つようになる」（101頁）と考える。

入植者たちは、南拓を通して日米開戦を知る。祖国の戦況のニュースが伝わるが、戦争中、男性たちは、ブラジルという遠い地にいる自分たちは忘れられているという

疎外感と、祖国の戦争に貢献できない自責の念を感じた。一方で、日本の東南アジアの国々の占領によって、いずれは熱帯農業の指導者が必要となり、これまでの経験を「占領地の指導者」として、日本の発展に寄与する日が来るという希望も抱いていた。スエノは、困難な暮らし向きやマラリヤに苛まされる日々ではあったが、家族を戦争にとられないことに内心安堵する。

男性と女性の思考の違いは戦時下において、明らかになった。男性は国家と個人を結びつけて考えたが、女性は自らの生活や家族という個人的感情で受け止めた。ある時、山田とスエノが耕地で一緒にテルサード（山刀）を振るっていた。スエノは山田と同じくらいの力仕事に堪える。山田がスエノに「現地人の指導」ができると言うと、スエノは自分が働くのは家族のためであって、「お国のため」ではないという。それを聞いていた山田は、「男は国家を思い、名誉を思い、富を追い、名を求める」（113 頁）から鬱積がたまるが、女性は家族のためだけだから、全力であり、迷うこともない。山田は、これを軽視することはできないと考える。女性が「狭い世界」を思ってくれるから、男性が「外の世界」を考えられるのだと、女性の了見を評価している。

第二次世界大戦中、ブラジルは当初は枢軸国寄りの姿勢を示していたが、途中で同盟国支持に転換する。1942 年にブラジルは日本と国交を断絶し、1951 年まで日本からブラジルへの移民は中断する。アマゾン奥地にあったアカラ植民地も、州憲兵の監視下に置かれる。州政府は「日本語使用禁止令」を出したため、公的空間で日本語の使用や教授は厳禁となった。州憲兵は入植者の家の家宅捜索を行う。山田家にも州憲兵が立ち入り、山田は日本の学校の教科書を隠して難を逃れるが、その他の数少ない日本語の本は没収された。立ち入りの時、スエノは辞書の上に座るという危険を夫と子供のために冒す。山田家では、夫の留守中に州憲兵が立ち入り、天皇、皇后の写真の入った額縁が粉々に壊される事件も起きている。

日伯国交断絶後、ブラジル政府は日本領事館員の監禁や在伯日本企業の認可を無効にする。このため、南拓の社員は日本に帰国する。一方で、ブラジル政府は日本人の植民地経営については従来通りとしたため、入植者の生活に直接影響することはなかった。しかし、戦中、ドイツの潜水艦がブラジル商船を撃沈する事件がおこり、ベレン市内で暴徒化したブラジル人が枢軸国の出身者の家に火をつけるという事件も起きる。ドイツ人やイタリア人と違って、容貌ですぐに日本人であると判別されるため、焼打ち被害を受けた。大使館員や南拓社員には安全な帰国が保護されるが、入植者たちへは何の保証もなく、庇護を受けることもなく、枢軸国や日本の行為によって、ブラジルで他国人から恨みを受け、自衛しなくてはならないことに、移民は“棄民”として見放された立場を痛感する。残された入植者たちは、アカラ野菜組合を「アカラ産業組合」に改組する努力を怠らず、「自治、自活の意欲」を育む。

1945 年 8 月 15 日に日本が降伏すると、移住者の多くは帰国することは不可能であると考え、敗戦を契機として、ブラジルに永住することを決意する。山田は敗戦のショックで、自分の殻に閉じこもり、本ばかり読んで過ごす一方であったが、スエノは敵性国人である日本人がどう扱われるかわからないと、不測の事態に備え、畑仕事

に専心する。しかし、体を酷使し続けたスエノは、終戦の年に 47 才で心臓麻痺により突然亡くなる。

4.2　胡椒栽培への転換

アカラ植民地では敗戦後も、適正作物を選定できない状況が続いた。しかし、1933 年には既に胡椒の苗がアカラ植民地にもたらされていた。南拓社員の輸送監督で、第 13 回のアカラ入植者を引率した臼井牧之助が途中に寄港したシンガポールで植物園に偶然立ち寄り、そこで胡椒の苗 20 本を購入して、アカラ植民地で栽培することを考えた。南拓社長から、ブラジル在来種は品質が良くないと聞いていたからである。臼井はアカラ植民地のアサイザール農事試験場に植えたが、アカラ植民地の惨状や南拓会社の経営難などで、苗の存在を放置してしまう。その後、1935 年の南拓会社の事業整理で農事試験場を閉鎖した時に、2 本だけ生き残っていた胡椒の若木を加藤友治（第 2 回入植者）、斎藤円治（第 7 回入植者）が譲り受け、それぞれの耕作地に植樹した。二人は、戦争中にも南洋種胡椒を研究しながら育て、800 本まで増やす。さらに、この時期は、東南アジア諸国が戦禍に巻き込まれていたため、国際市場において胡椒が高騰していた。胡椒に対する期待から、アカラ植民地の入植者たちは、加藤、斎藤の両氏から分けてもらった苗を栽培し、栽培方法について情報交換をする。

アカラ植民地の産業組合は戦争中に、販売や購買の権利が州政府の管理下にあった。このため、胡椒も安い価格で叩かれていた。アカラ植民地の人々は、戦時下の延長にある植民地を再建するには、自分たちで州都ベレンまで輸送する手段を講じる必要があると考え、船大工の経験をした者はいなかったが、大工仕事を得意とする者を中心に若手が集まり、木造船を建造する。ベレンまでの輸送路を自力で確保すると、パラ州政府と交渉して、1946 年に、日本とブラジルが外交関係正常化（1951 年）をするより前に、商取引の行使権を組合に取り戻すことに成功した。角田は「ブラジル日系人の六十年近い歴史の中で、団体が体当たりで政府に彼らの生きる権利を擁護した珍しい例の一つである」（182 頁）と述べている。また、1946 年には、入植者から集めた組合の事業資金の中から、日本に戦災救援金を送ることを満場一致で決めている。

山田義一も 1946 年に胡椒栽培に切り替える。妻を亡くし、幼い子供たちを守るために一心不乱に働く山田の姿を見た仲間は、山田の後妻を密かに探し始める。入植地では、妻を亡くした痛手から、働く気力を失くす男たちが少なからずいたからであった。

1947 年には産業組合の売り上げのうち、胡椒は米、野菜に次ぐ第 3 位となる。1948 年には、アカラ植民地の入植者全員が、胡椒栽培に転換する。在来種と異なって、南洋種ピメンタは栽培が難しかったが、それまでの「熱帯農業の経験」を生かそうと、入植者たちは一丸となって、窮乏生活を続けながらも胡椒栽培に専心した。

4.3　定住化と家族の形

アカラ植民地ではほとんどが家族連れで入植したため、妻子という支えが困難な時

期を乗り越える原動力になったと、角田は分析する[15]。現地調査で山田義一と話しをしたときに山田家の家族についても質問することを依頼した時に、山田氏は「この家の家族関係は非常に複雑ですよ」（228 頁）と答えている。長男元（19 才）は、黒水病で両親が死んでしまい、遺児となっていた豊江（18 才）と結婚することになる。元は親の決めた相手に逆らうことなく、「心を温め合う家族もなしに生きてゆくには、アカラの生活はあまりにきびしい」と考えて結婚を受け入れる。戦前の移住者は、海外移住のような困難な暮らしにおいては、日本の家族制度が重要な基盤であったと考える[16]。角田は次のように記している。

> 移住者にとって、跡取り息子は、家族制度が崩れた日本では想像もつかない重要性を持っている。男の子は早くから労働力を提供し、一家の経済を豊かにするというだけではない。父の努力のあとを受け継ぎ、移住国の土にその仕事の根を下し、枝を張る期待をかけられる。異国に永住を決意した人々は、ほとんど例外なしに、海外発展を民族の問題の規模で考え、素朴な理想と使命感を持っている。（191 頁）

親戚もない海外で根を張るためには、まずは家長がその役割を果たし、長男がその意志を引き継ぐことが何よりも必要である。そのためには、家長ができるだけの基盤を作らなくてはならない。山田も、長男以外の子供たちがまだ幼く、これでは家が回らないと考え、胡椒栽培がある程度軌道に乗った 1947 年に、仲間の勧めで再婚する。相手のみつよは 13 歳を筆頭に 4 歳まで 5 人の子を連れた未亡人であった。男手が無ければ植民地で生きることは難しく、「聞いた以上は互いに助け合ってゆくほかないじゃないか。日本人同士なんだ…」（189 頁）と再婚する。みつよは、再婚翌日から胡椒畑で夫と一緒に働いた。

山田には、先妻スエノとの間にアカラ植民地で 4 人の子がいるため（2 人死亡）、9 人の子の親となった。さらに、みつよとの間に 3 人の子供が生まれている。角田は取材で山田義一・みつよ夫妻に面会した時に、みつよの夫に対する言葉遣いが主従関係に近く、明治時代に生きた自分の母親の言葉遣いに重ね合わせる。しかし、みつよの態度に卑屈さはなく、絶対の存在に身を任せる姿勢に角田は安定感を感じる。移住地では、貧困や病気の蔓延から、家族の死は身近であった。渡伯後すぐに子供を病気で失った夫婦、妻を黒水病で失い、退耕して別の町へ行くが、酒浸りとなり、子供を遺して死んだ者、両親が黒水病で亡くなり、五男二女が残って、若干 21 歳で長男が家長となり、家を守った兄弟、入植して数年後に父親が死去したため、母親を支えて 4 人の弟妹を育てた者等がいた。このため、山田家のように入植者同士で、ステップファミリーを築いて、助け合うケースが多く見られた。

1948 年、アカラ産業組合は公認産業組合として、ブラジルで認可され、「トメアスー

[15] 角田 (1976)、137 頁
[16] 落合 (1989)、18 頁　近代家族の特徴の一つとして、「家族の集団性の強化」が挙げられている。

混合農業産業組合」と改称する。アカラ植民地の名称も「トメアスー植民地」と改められた。1952 年頃から胡椒が高値を続け、トメアスー植民地はようやく躍進をする。1953 年から 1954 年はトメアスーの“黒ダイヤ”ブーム第 1 期となった。1953 年には戦後初めての移民 28 家族がトメアスーに入植し、移民再開となる。植民地の人々は、やっと十分な収入を得られるようになり、家を建てることで、トメアスーを子孫のために魅力ある場所にしなくてはならないと考える。また、子供たちがブラジルの上級学校で得た知識をトメアスーの発展に還元することを願う。

「おれたちの子供は、ブラジル人に立派に認められる家庭に育ち、わが家、わが故郷に誇りを持って、社会に立たなければー」と、トメアスーの人々は、しっかりと現実に目を向けて考えた。（196 頁）

角田はトメアスー植民地の人々の声を代弁して、移民 1 世のブラジルでの経験を次の世代に受け継ごうとする姿を捉えている。

第二次世界大戦をはさみ、日本からブラジルへの移民は中断していたが、1953 年に再開し、トメアスー植民地では胡椒栽培の成功から入植者が増加する。胡椒栽培の箇所で述べたように、戦前組は後から来た戦後組を最初は契約労働として雇い、胡椒栽培を伝授して独立まで面倒を見た。戦後組は、戦前組に雇われることに対して不満を抱き、両者の間で衝突することもあったが、戦後組が独立した後も、本家と分家の形で関係は続く。さらに、戦前組と戦後組で盛んに婚姻関係を結んで、親戚関係になることで、植民地には確固とした基盤が形成された。

その後、1956 年に胡椒の値が暴落する。東南アジア諸国が復興し、国際市場に大量に出たためである。1957 年、不況を乗り切るために、産業組合は胡椒成功を担ってきた幹部を刷新する。さらに、1959 年に不況を乗り越えた時にも、組合強化のために、幹部を刷新する。角田は、トメアスー産業組合は「平凡な農業移住者の寄り集まり」（202 頁）であるが、だからこそ、常に合議により運営され、民主的な成長を遂げたと分析する。

しばしば彼らの理性的、合理的な面に驚かされた。“古きよき時代”の日本を厳然と残しながら、祖国の敗戦を迎えても、南伯に見られたような勝ち組、負け組の争いなども起さず、産業組合は常に近代的な合議制で運営されている。（195 ～ 196 頁）

トメアスーへの入植者は増え続け、戦前入植者がコロノ（契約労働者）として戦後入植者を雇い、胡椒栽培の指導をして、独立まで面倒をみた。1959 年には、トメアスー植民地で開拓三十年祭が執り行われた。パラ州知事代理やベレンの副領事参列のもと、五百名ほどが参加し、山田をはじめとする第 1 回入植者が表彰された。

5．おわりに―角田房子の〈外地〉移住者へのまなざし

本作品は、作家角田房子がブラジルでの現地調査をもとに書かれた記録文学である。文字通り記録と物語が合わさっており、〈語り手〉が物語の叙述を進める中に、〈筆者〉の叙述が挟まれる。日本の移民政策は、国内の耕地面積の少なさから、明治時代より国策として積極的に行われた。そして、第二次世界大戦終結とともに、中国、朝鮮、台湾や東南アジア諸国で日本が植民地政策を敷いていた地域から、多くの日本人が引き揚げ民として、日本に帰国せざるを得なかった。一方で、ブラジル移民は戦時中、本国の擁護もなく、“棄民”の境遇を強いられ、ブラジル社会からは敵性国人として扱われた。角田はアマゾン流域で交通も不便であり、原始的な生活を強いられながらも、入植者が定住を決意し、1960 年代の日本の高度経済成長を知りながらもなお、ブラジル社会に根を張る日本人移住者の姿を描写する。

現在でも、「胡椒＝トメアスー」と連想されるほど、ブラジルではトメアスーは胡椒栽培地として知られている。本作品は、第 12 章の最終章が角田の現地調査の記録であり、記録文学としての部分は 11 章ある。胡椒については、伏線として言及はなされるが、胡椒栽培の成功物語は 10 章「ピメンタ誕生」にやっと描かれる。角田は胡椒栽培で成功するまでの道のりを、日本人移民が“積み重ねたもの”は何だったのかを、作品を通して模索する。移民を題材とした文学の多くは、移民がどんな苦労を強いられたのか、どんな悲惨な生活送っていたのかを伝えることが多い。本作品は、そうした〈外地〉における日本人移民に共通する姿だけでなく、角田が現地調査を実施した 1965 年地点においても、日系農家によりトメアスー植民地が維持され続けてきた要因を探っている。角田は現地でのインタビューを介して、入植者の協働、自治意識、民主性と共に、家父長制度内での女性の献身や、異文化における女性の適応力、ステップファミリー形成による家族の安定を見出している。

記録文学は記録文書やインタビューを通して、作家が創作したフィクションである。そのフィクションの部分を考察することで、単なる記録としてではなく、「血の通った人間」の生が立ち現れてくる。

―参考文献―

落合恵美子『近代家族とフェミニズム』（勁草書房、1989 年）
川村湊『ハポネス移民村物語』（インパクト出版会、2019 年）
角田房子『アマゾンの歌―日本人の記録』（中央公論新社、1976 年）
〃　『ブラジルの日系人』（潮出版社、1967 年）
武田徹『日本ノンフィクション史』（中央公論新社、2017 年）
西成彦『外地巡礼』（みすず書房、2018 年）
三田千代子「ブラジルの移民政策と日本移民」日本移民学会編『日本人と海外移住―移民の歴史・現状・展望』（明石書店、2018 年）

丸山浩明（編）『ブラジル日本移民百年の軌跡』（明石書店、2010 年）
丸山浩明「アマゾンと日本移民」立教大学史学会『史苑』74 巻第 2 号、pp.1-26、2014 年
水田宗子『ヒロインからヒーローへ 女性の自我と表現』（田畑書店、1982 年）